



# 三到図書館 ニュース

2010年4月発行  
No.66

J. F. Oberlin University Library

◇巻頭メッセージ  
◇教員からのメッセージ

◇教員向けアンケート集計報告  
◇図書館読書運動プロジェクト活動報告

◇データベースと蔵書の紹介  
◇図書館からのお知らせ

## 📖 巻頭メッセージ

### ある読書体験

桜美林学園 前学園長・桜美林大学名誉教授 柳原 鐵太郎

推理小説や捕物帖は簡単に読める。しかし哲学の本は簡単に読めない。わからないといったほうがよい。私が大学に入って、いろいろな専門分野がたくさんあるのに目のくらむ思いがした。特に哲学には興味を引かれた。ある先生から波多野精一の宗教哲学がすばらしいということを聞いた。何がすばらしいのかさっぱりわからない。そこで波多野宗教哲学を読んでみようと思った。波多野精一全集を買い、解説書として「宗教と哲学の根本にあるもの」（岩波書店）を買い込んで、田舎に帰った。私のうちは町中にあるため音がうるさいので静かな近所の家を借りてもらって勉強することにした。いざ読み始めたのだがさっぱりわからない。具体的なことは何も書いてない。物語が全然ない。すべてが概念語で書かれている。何度読み返してもわからない。今まで概念語ばかりで書かれた本を読んだ経験がなかった。哲学書を読んだ経験がなかった。しかし波多野宗教哲学はすばらしいという。世界的なレベルのものだという。私は困ってしまった。しかし何とかこの哲学のすばらしさをつかみたい。読んで読んでわからないのだ。悔しかった。夏休みが終わって結局何もわからない。

夏休みが終わって先生に質問をした。「いくら読んでもわかりません。私は生涯理解できないのかもしれませんが。死ぬまで読んでいってこのままで終わったらどうなるのですか」とすると先生答えていわく、「あなたという人間はそのくらいのものでしょうね。ほかに何をしても同じかもしれませんね」先生は禅宗のお坊さんであった。

私は考え込んでしまった。これは学問というものは大変なことなんだな。私はこのままわからないまま終わるかもしれない。呆然としてしまった。しかし何



をしても同じことなら、もう少しがんばっていくしかないと考えた。わからないままとにかく少しづつ続けることにした。もちろんほかのことも勉強して単位を取って、とにかく卒業しなければならない。しかしいつも波多野宗教哲学が頭にひっかかっている。気の重い毎日であった。単位をとるためのほかの勉強は、ずいぶん役に立った。宗教哲学の本の一部分がわかってきた。全部はわからない。しかし少しわかってきた。3年ぐらい続けたと思う。

ある日のこと、読み始めたところ今までわからないところがわかってきた。全体像がおぼろげながらわかってきた。こういうことだったのか。この哲学は人間というものをよく説明している。人間のことは、ほぼこれで理解できる。人間のことがわかれば多少なりとも生きていける……。うれしかった。

ほかの本を読むときもこの姿勢を持ち続けている。プラトンの「パイドン」も、バルトの神学も、ティリッヒの神学も……。それ以来、波多野宗教哲学はずっと読み続けている。読むたびに新しい発見をする。大学のゼミにおいてもずっと波多野宗教哲学を読み、みなさんに読む訓練をしてもらっている。

三到図書館の思い出と新入生へのメッセージ

## キャリア能力・しごと能力の養成に大学図書館の利用を

ビジネスマネジメント学群教授・キャリア開発センター長 岩井 清治

本学の図書館本館の完成は大学設立4年後の昭和45年（1970年）でした。もともとの中学・高校グラウンド上に建てられたため、グラウンドは当時田んぼであった現在の地に移りました。当時の学生数は1476名、今では図書館の狭さが課題ですが、その当時は十分余裕がありました。また、5階ロビー（現在の5階中国書コーナーの壁）に掲げられているトルストイの大型写真は、当時開催されていた大阪万博のソ連パビリオンに飾られていたものです。創立者清水安三先生が大木昭男先生のロシア語訳をつけた長い手紙で記した熱い思いが、そのままソ連当局に通じるものとなり、わざわざ遠方の本学まで贈られたものであると、トルストイ信奉者であった安三先生ご自慢のものでした。また書庫には、設置間もない経済学部の初代学部長高谷道男先生の貴重な蔵書が数百冊も寄贈されています。横浜のご自宅から学長車で数回にわたって運びこんだものです。設立間もない大学でしたが、先生方こうした精魂かけた熱い思いがあちこちに感じられました。それ以後、学生数が6倍近くにもなった今日まで、図書館は知の宝庫として大学教育の多くを担ってきたわけですが、ここで、現在の大学が抱える喫緊の課題「キャリア教育・しごと能力養成」の面から大学図書館の果たす役割を考えてみたいと思います。

すでに10年以上も前のことになりますが、アメリカでも伝統あるリベラルアーツ大学の代表的存在といわれるオベリン大学のダイ学長が、本学で講演された時「リベラルアーツ大学で学ぶとは、ミシシッピー川を航行する船乗りの能力養成に喩えられる」と述べられました。常に変化する川の流れ、淵と瀬、水の深さ、流れの速さ、風の方向、川底の変化等々、その時々状況・条件に応じて対応できる船乗りの能力の養成を、人間教育と重ねてリベラルアーツ教育の本質として論じられたものです。知識学習だけにとどまらない、変化に適切に対応できる能力、つまり“できる能力”の

養成、“適切な判断力と行動力、つまりしごと能力に通じる能力”の養成に直接結びつく教えであると思います。プロフェッショナルアーツ



に比べて職業にはかなり離れた印象が持たれがちなりベラルアーツ教育に関するこの指摘は、大学教育一般にとっても、しごと能力養成がとくに意識されなければならないことをよく物語るものではないでしょうか。

それでは、そうした“できる能力”の養成にとって大学図書館はどのように貢献できるのでしょうか。できる能力にはそのまま“つくる・行なう”作業が求められます。すくなくとも学習した知識の量を測るものは別の面での評価がなされるものです。そしてそのつくる能力養成の一番近くにあるものは、それぞれの授業で与えられる課題作成、報告書作成、レポート・小論文、さらに卒業論文等々の作成とプレゼンテーションにほかなりません。そこには資料集めから纏めてメモにする力、そのメモから筋道を作り上げ、しかもそれまでになされていない新しい視点・別の見方を模索する力、変化への対応が常に迫られる社会動向を視野に、常に自分で考え、自分で作る、という能力と作業が求められます。

将来、企業・職場で求められるしごと能力には、こうした地道な繰り返しに耐える力、あきらめずに継続する力が土台となります。大学生活での貴重な収穫物であるしごと能力の養成に大学図書館を十分に活用して下さい。キャリア能力・しごと能力は実務体験を通してより具体的に発揮されますが、その土台はこうした知識を媒介とした“つくる能力”の積み重ねでもあります。ご健闘を祈ります。

## 三到図書館の思い出と新入生へのメッセージ

### 私と図書館 初めから

リベラルアーツ学群教授 狩野 博

新入生の皆さんはさまざまな抱負と一抹の不安を抱えて大学へ御入学のことでしょう。私は40年近くこの大学で経済学部（今年度から完全にリベラルアーツ学群〔LA学群〕に吸収されます）に所属し、財政学と地方財政論の講義を担当してきましたが、今年度限りで皆さんと入れ替わりに定年退職することになります。そこで、皆さんの大学生活の一助となることを期待しつつ、私自身の学生時代と図書館とのかかわりを振り返ってみようと思います。

私は中学生の時代から図書委員を務めることが多く、図書館担当の先生やそこを談話室のようにして集まっておられる若い先生方の指導を受ける機会に恵まれ、すっかり図書館に居着いてしまいました。先生の手伝いで、当時はまだ存在した都電（市街電車）に乗って王子から日本橋の丸善まで、本や事務用品を買いに時々出かけたことを楽しく思い出します。その図書館の先生の担当教科は数学でしたが、中学教員をしながら本来の専門の建築学の研究を独学で続けられていたようです。先生との師弟関係はその後私的に続き、たまたま私の進学した大学は、専門分野は違いますが先生と同窓ということになりました（先生の場合は旧制高校）。また、私の大学院生時代にメーカーの機会にお会いした時、先生は工業高校の教員をされていましたが、「お前に先を越されたな」と言われたことを懐かしく思い出します。その後、先生は日本大学生産工学部の建築学の教授に就任され、私が町田市内に自宅を新築した時、先生の研究室に設計を依頼し、総RCの新奇な住宅が出来上がったという次第です。

ところで、私の大学生時代と図書館との関係ですが、その進学とまさに同時に、日米安全保障条約の改定問題（いわゆる60年安保）に遭遇することになりました。その時からちょうど50年後の今日、この条約に制約された日米関係は、核兵器三原則に関する密約や沖縄の普天間米空軍基地の返還など、あらためて日本の大きな国民的課題となっています。当時の目の前で進行する大学ぐるみの安保反対運動の発展に大きな衝

撃を受け、学生自治会の活動に参加する中で、日本の現状に対する認識不足を痛感した私は、マルクス・エンゲルス選集や「日本資本主義講座」（岩波書店）を始めとして、関連する文献を猛烈な勢いで勉強しました。その勉強の拠点となったのが、学資の余裕もなかったので、大学図書館と地域の公立図書館で、時間があれば授業はそっちのけで入りびたりでした。大学入学後しばらくは、こういうことはよくあることですが、社会科学と社会学の区別が正確に認識できていなかったために専攻課程を間違え、鬱々としていた私の気分はこれで払拭され、3年生のときに人文専攻から経済専攻へ編入学し、その後、別の大学の大学院の経済学研究科を経て今日に至るということになったのです。この間、図書館の談話室でよく会った友人たちとの談論が良い思い出となっています。LA学群の新入生は特に、3年生からのメジャー（専攻）の選択をよく考えておく必要があります。

最後に、図書館の利用について、何より大切なことは図書館に慣れ、親しむことです。ここでよい指導者やよい友人と出会うことができます。次に、与えられた課題だけ勉強するのではなく、複数の文献を参考にして、異なる見解に触れ、それをノートなどに整理しておくことです。その上で、図書館も蔵書や機能にそれぞれ特徴がありますから、インターネットなどを利用して、図書館を選択し、発展的・進取的に利用するように心がけましょう。





## 👉 新入生の皆さん、在学生の皆さんへ

# インターネットから図書館を訪れよう

リベラルアーツ学群専任講師 多々良 直弘

図書館を訪れると様々な本との出会いがあります。目当ての本を見つけるのは当然ですが、その本の近くにある本たちとの出会いもあります。「あ、こんな本もあるのか!」「この本面白そう!」と様々な本を手にとって見ていると、あっという間に時間が経ってしまうものです。探していた本よりも面白いということもしばしば…。

図書館に行って本を探し、様々な本と出会う。これはこれまでの、またこれからも続くであろう図書館の基本的な利用方法ですが、今の私たちが図書館を活用できる方法はこれだけではありません。今は図書館に行かずして、インターネット経由で図書館を利用する方法もあるのです。

図書館のホームページを訪れると「データベース」という文字があります。これをクリックしてみてください。すると『MAGAZINEPLUS』『聞蔵Ⅱ』『日経テレコン21』『BNCオンライン』『ProQuest』『日本の論点Plus』などなど、合計で30種類以上のオンラインデータベースがあります。これらも私たちに新たな「知」との出会いを提供してくれます。もちろん桜美林大学の授業でも活用されています。

リベラルアーツ学群の1年生は春学期に「リベラルアーツセミナー(LAS)」を必修科目として履修することになっています。LASは、アカデミックな文献を読み解き、問題を探し出し、それを調査して文章としてまとめることを目的とする授業です。このLASでは、過去の新聞記事が収められている『聞蔵Ⅱ』や『日経テレコン21』、現代社会の諸問題を様々な立場の専門家たちが論じている『日本の論点Plus』などのデータベースにアクセスして、情報を集め、社会問題を考察することもあります。



私の担当している授業でもデータベースを活用しています。例えば「時事英語講読」という授業では、日本という国や文化、また、日本人が海外の新聞でどのように報じられているのかということを考えています。この授業では、多くの学生がアメリカや世界で活躍している日本人(例えば、イチロー、松井秀喜、宮崎駿など)がどのように世界のメディアで報道されてい

るのかということを探しました。では、どのようにニューヨークやロンドンで発行されている新聞を入手することができるのでしょうか。これを可能にしてくれるのが、『ProQuest』や『LexisNexis』などのデータベースです。これらのデータベースにインターネットからアクセスし、自分が調べたいキーワードを入力すれば、桜美林大学にいながらにして海外の新聞記事が容易に手に入ります。



また、データベースは英語の研究や勉強にも役立ちます。まずは全20巻からなる世界最大の英語辞典『オックスフォード英語辞典(The Oxford English Dictionary)』です。この辞書には語源や意味、各時代での使用方法、豊富な用例など様々な情報が掲載されています。この辞書が電子化され、図書館のホームページから利用することができるようになりました。英語専攻の学生たちもセミナー論文や卒業論文の調査をする際に使用しています。

最後に『BNCオンライン』について紹介したいと思います。BNCとはThe British National Corpusと呼ばれるコーパスのことで、約1億語が収録された世界最大のイギリス英語コーパスです。コーパスとは一言で言えば「実際に使用された言語表現を収録した言語のデータバンク」のことです。このBNCでは、イギリス英語の母語話者が使用した言語表現を調べることができ、私たちが学校教育では出会わなかった表現(間違っていると教わった表現も!)が実際には頻繁に使われていることがわかります。例えばsurpriseという動詞が受動態で使用された時に、私たちはbe surprised atという決まった表現を暗記してきました。しかし、BNCで調べると実際にはbe surprised byという表現の方が多用されていることがわかります。

図書館は素晴らしい本たちとの出会いの場であると同時に、インターネットを通じて新たな「知」を私たちに提供してくれます。ここで紹介したデータベースの利用方法はほんの一部です。インターネットから図書館を訪れて、現在のネット社会ならではの図書館の利用方法をぜひ楽しんでみてください。

👉 新入生の皆さん、在学生の皆さんへ

## 時空を超えてつながる場所

総合文化学群専任講師 小早川 朗子

総合文化学群の音楽専修でピアノを担当している小早川です。私は、教員兼ピアニストという身ですが、これまで日本のみならず、ヨーロッパの図書館にも非常にお世話になりました。大学院生時代東欧ポーランドに留学し、修士と博士論文で世に知られていないポーランド人作曲家の研究をしており、その作曲家たちの作品の楽譜や資料を集めるためドイツやフランスの図書館にまで足を運びました。

ヨーロッパの図書館の建物は非常にユニークで、例えばベルリンの図書館は旧東ドイツ領にあり、重厚でどっしりした建物。入口で荷物検査があり、ドイツ語しか話せない係の人とは身振り手振りの会話、建物内は歴史を感じさせる彫刻や大理石の階段などがあり、それだけでも圧倒されるが、とにかく広く、同じようなドアが並んでおり、曲がる場所を間違えると目的地につけない、という恐怖があった。

英語の話せる人と呼んでもらい、まず利用者カードを作り、音楽部門の部屋によくたどりつく。お目当ての作曲家を探し出し、目録カードを片っ端から見て、その請求番号を一枚ずつカードに記入する。一日に二度の書庫内資料請求ができ計20冊、それらを今度はコピーサービスに持って行き、セルフでコピーをする。

ポーランド内の図書館の資料は二度の世界大戦でほぼ全焼してしまい、私の研究テーマである作曲家の全作品の楽譜を見ることはほとんどできなかった。彼らの作品目録は資料に載っているだけで、どんな曲なのだろうかと想像は膨らむばかり。目をつけたのが楽譜の出版社だった。19世紀後半は、ポーランドの政治的情勢が悪化しており、作曲家の多くはドイツの出版社に頼っていたため、ドイツの図書館、出版社なら私の探す楽譜があるかもしれない……。残念ながらライプツィヒの有名出版社には過去の出版物の情報は全くなかったし、担当者も「ポーランドの作曲家？知ら

ないなあ」という程度の反応。ベルリン図書館にあった私にとっては宝物のような楽譜たちも、一度も書庫から出されたことのないような状態で、コピーをすると紙の端が古びて灰のように粉々に砕けてしまった。作曲家自筆の献呈文とサインを楽譜上に見た時には本当に感動し、思わず心の中で語りかけた。150年の後に、はるか遠くの日本から女の子が訪ねてきて、あなたの楽譜とサインにこのように感激している姿を想像されましたか……。

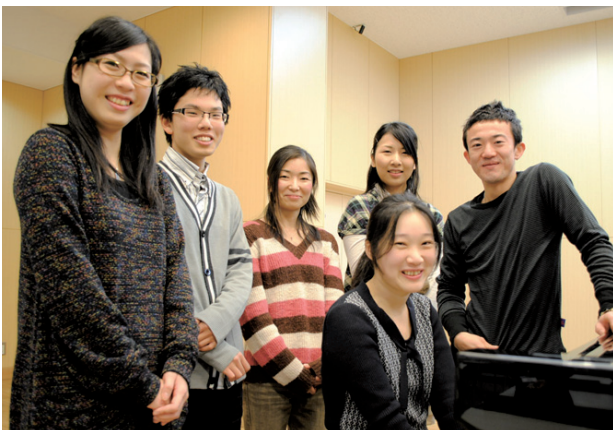


図書館は不思議な場所だと思います。時空も世界も簡単に超えてしまいます。皆さんもそんな体験をしに図書館に行ってみるのはいかがでしょうか。

桜美林の図書館には書籍や雑誌だけではなく、今日の情報社会にふさわしく「データベース」という情報の宝庫が30種類も用意されています。私のピアノクラス・ゼミではこの中の『NAXOS Music Library』（ナクソス）を頻繁に使い、学生達にいろいろな作曲家の作品を聴いてもらっています。その作曲家と同時代の作品や影響を受けた作品など、ピアノ以外のジャンルも流し、イメージを作ってもらいます。曲を決めるときにも大活躍します。ナクソスで様々な作品を聴いてもらい、自分が勉強してみたい好きな曲が決まったら、OPAC（蔵書検索）で楽譜を探し、楽譜に付けられた番号（請求記号）を伝えます。学生達はその番号の楽譜を探しに図書館に行きます。お気に入りの作曲家の楽譜を長く借りている学生もいて、そんな時は大体誰なのか見当がつくので注意します。「他の人も借りたいのよ、早く戻してあげて。」図書館に楽譜がない場合は『Classical Scores Library』で楽譜をプリントアウトしてあげることもあります。

ゼミ・卒研では、演奏会の際に作品解説を自分で書くことを課しますから、こちらも図書館でさまざまな音楽事典や本を読み、知識を増やし解説を書いています。ゼミ生を見ていると自然と図書館の利用の仕方が上手になっているように思います。

大学は教員からの指示を待つ場所ではありません。若いうちにしっかりと自分の探究心を燃やし、いろいろな事柄に興味を持ってください。その時に図書館はいろいろと助けてくれると思います。



ゼミの学生たちと以徳館2階M201音楽ホールにて



## 教育活動と「桜美林大学図書館」 ～教員向けアンケート集計結果より～(2)

前副図書館長 堀 潔

本学図書館では、専任・非常勤教員の先生方がご自身の研究・教育活動に本学図書館をどのように利用されているか、図書館に対してどのような感想や意見をお持ちであるか、を把握して将来の図書館運営の改善に役立てるため、2008年6～7月に教員向けアンケートを実施した。お忙しい中ご協力いただいた先生方には、心から感謝を申し上げたい（※注1）。

今回は、本学の専任教員が授業やゼミなど自身の教育活動との関連で本学図書館をどのように利用しているか、どのように評価しているかについて、アンケート集計結果から見てきたものを紹介する。

※注1 教員向けアンケート各質問項目の単純集計結果は2008年度第6回図書委員会（2008年10月22日）、二次集計結果は同年度第9回図書委員会（2009年2月25日）にて報告されている。専任教員の先生方は、集計結果を学内共有ディレクトリにて閲覧することができる。

### ■ 教員の選書活動～多忙の中、過半の教員が選書を行っている～

現在、桜美林大学図書館では、図書館に所蔵されている資料の大半は教員による「選書」によって選ばれている（もちろん、学生諸君の「購入希望」も受け付けている）。「選書経験がある」と回答した教員は109名。来館頻度（※注2）に応じてその割合にばらつきはあるものの、全体として6割近くの教員は学生のために選書を行った経験がある（表1）。一方、「選書経験がない」教員にその理由を質問したところ、来館頻度に関係なく「時間がない」「事務手続きが面倒」との回答が上位を占めた（表2）。

※注2 専任教員の来館頻度を質問したところ、「(1)週に1度以上」「(2)月に何度か」を合計して75名、「(3)年に何度か」が60名、「(4)めったに行かない」「(5)まったく行かない」と無回答を合わせて56名であった。便宜上、(1)(2)と回答した教員を「来館頻度A」、(3)と回答した教員を「来館頻度B」、その他の回答と無回答の教員を合わせて「来館頻度C」の3つのグループに分けた。

表1：選書経験の有無【単一回答】（来館頻度別）

選書経験の有無	A	B	C	回答数
(1) ある	48	39	22	109
(2) ない	27	18	31	76
(3) 無回答・その他	0	3	3	6
総計	75	60	56	191

表2：「選書経験のない」教員は、なぜ「ない」のか？【複数回答】（回答者数76名）

なぜ「選書したことがない」のですか？	総計
(1) 時間がないから	21
(2) 事務手続きが面倒だから	19
(3) 予算が限られているから	3
(4) 自分のほしい資料は買ってもらえそうにないから	15
(5) 「選書ガイドライン」に「学生の利用を優先的に考慮して選書する」と書いてあるから	16
(6) その他	11

### ■ 学生諸君、図書館を利用しよう～授業等教育活動にとっての図書館～

本学図書館の蔵書は、研究活動にも教育活動にも沿っているとは言いがたく、学生に薦められる図書館であるかどうかも含め、積極的に「そのとおり」とは言えない、と教員は感じている。その意味では、本学図書館はなお発展途上の状態にある（表3）。しかし、そういう状況であっても、教員のほぼ9割は何らかの方法で授業を通じて学生に図書館を利用するように勧めているし、学生に図書館を利用させる工夫を授業の中で積極的に行っている（表4）。

表3：学生に薦められる図書館か？【単一回答】（来館頻度別）

学生に薦められる図書館か？	A	B	C	回答数
(1) そう思う	17	12	5	34
(2) まあ、そう思う	38	25	17	80
(3) どちらとも言えない	10	15	8	33
(4) あまりそう思わない	6	5	9	20
(5) まったくそう思わない	1	0	1	2
(6) わからない	2	3	12	17
(7) 無回答・その他	1	0	4	5
総計	75	60	56	191

表4：授業での図書館利用推奨【複数回答】（来館頻度別）

学生に図書館の利用を推奨するためにやったこと	A	B	C	回答数
(1) 指定図書を指定した	48	35	24	107
(2) 授業で参考文献リストを配布した	46	32	22	100
(3) 図書館の資料を使わなければならないような課題を出した	40	23	13	76
(4) 学生に対する特別のガイダンスをやってもらった	20	15	15	50
(5) その他	6	4	3	13
(6) 何もしたことがない	0	6	14	20

### ■ 教員は真面目に学生の教育にとりくんでいる～「教員アンケート」を終えて～

この「教員アンケート」を通じて、本学の教員は総じて学生の教育について真面目に取り組んでおり、改善すべき事項は多々あるとしても、学生の教育のために図書館が果たすべき役割は非常に大きい、と感じている様子が回答の随所に読み取れた。今回のアンケートを通じて、多くの先生方からさまざまな意見をいただけたことは図書館にとって非常に貴重な機会であったと思う。あらためて、ご協力いただいた先生方に感謝申し上げたい。

なお、アンケートの最後の部分にある自由記述欄には、図書館設備の老朽化、狭隘化、外部別置図書が多数あることによる利便性の悪さなどについての不満や意見が多く寄せられていたことも付け加えておきたい。

## 図書館読書運動プロジェクト活動報告



### ■ リブシネマ (LibCinema) 開催



右端から郭監督、中生先生、藤田ラウンド先生

2009年10月16日の夕方にドキュメンタリー映画『緑の海平線 台湾少年工の物語』（2006, 台湾）上映会とトークイベントを開催しました。発起人は中生勝美先生（リベラルアーツ学群教授）と藤田ラウンド幸世先生（基盤教育員非常勤講師）で、中国学会、桜美林生協との共同開催です。中生先生、藤田ラウンド先生の挨拶、現在、桜美林で台湾史を講義されている何義麟先生（リベラルアーツ学群講師）の基調講演に続き、映画が上映されました。

上映後、この映画の監督である郭亮吟さんと藤田昌平さん（慶応義塾大学講師）をゲストにお招きし、トークイベントを行いました。祖父が少年工だったという台湾から来た大学院生や、お父さんも同様の経験をお持ちであるという藤田ラウンド先生のお話などに、集まった学生たちも真剣に聞き入っていました。

台湾が日本の植民地だったという歴史すら知らない世代が増えてきていますが、自分と同じくらいの年代の若者の記録映画と郭監督や参加者との意見交換から、日本の現代史について認識を深くした学生たちも多かったことでしょう。



桜美林コメント大賞の各賞受賞者と図書館長

### ■ 桜美林コメント大賞授賞式開催

2009年12月18日の昼休みに、学而館1階のラウンジで、2009年の読書マラソン桜美林コメント大賞授賞式を開催しました。実行委員の立道絵理さん（リベラルアーツ学群3年）、片山博文先生（リベラルアーツ学群准教授）の挨拶に続いて、生協留学生委員会の玄留菜さん（リベラルアーツ学群2年）の司会で留学生コメント大賞の授賞式が行われ、堀潔副図書館長（リベラルアーツ学群教授）から賞状と賞品が贈られました。

桜美林大学では500名を越える留学生が学んでいます。その留学生たちからも読書コメントを募集しようと、今年から留学生部門を立ち上げて募集を行いました。中国語や英語、韓国語など何語で読んでもいいけれど、コメントは必ず日本語で書くこと、というハードルに挑んだ留学生から寄せられたコメントは、残念ながら約50枚という結果でしたが、次回はぜひ100枚越えを目指したいと思います。

続いて立道さんの司会で桜美林コメント大賞の授賞式が行われました。大学生協で行われている読書マラソンと連動し、最終的に900枚を越えたコメントの中から、大賞、図書館賞、学生賞、生協賞、審査員特別賞などが選出され、受賞者が次々と壇上に登り、永瀬順弘図書館長（リベラルアーツ学群教授）から賞状と賞品が贈られました。それぞれ個性豊かなコメントに、参加者も興味深そうに目を通していました。

それでは今回の受賞コメントの中からいくつかご紹介します。まず、桜美林コメント大賞を受賞したのは、ペンネームNさん（リベラルアーツ学群1年）の『青の炎』（貴志裕介著）に対するコメントです。

「人を殺めてはいけない」そんな子どもの頃から当たり前に思っていること、人としての常識を裏切り、自分の人生を賭けてまで守りたいものがあるだろうか。正直、私にはそこまでする勇気はない。しかし、主人公にとって母と妹を守るためには悪魔のような義父を殺す必要があった。完璧なはずの計画がかけりを見せ始めたとき、追いつめられた主人公の行動に「人を殺めてはいけない」と思いつつも胸を打たれた。

主人公の心理に自分を投影し、倫理の境界線で揺れ動く自分の感動を、素直にコメントしているところが評価されました。



続いて図書館賞は、ペンネーム・しんくさん（リベラルアーツ学群1年）の『イワンのばか』（トルストイ著）に対するコメントです。

What is it to be really right? 本当に正しいことは何なのか。無抵抗主義は正しいことなのか? そもそもこの世界に「正しい」ものなんて本当にあるのだろうか。単純な物語の中にいくつものキーワードが散りばめられていて、おもしろかった。そのキーを使って自分なりの答の扉を開くことがこの作品の醍醐味ではないかと思った。Open the door! 真実よ、今開け!!

『イワンのばか』と言えば文豪トルストイの有名な作品です。みなさんも一度くらいは読んだことがあるでしょう。でも大学1年生のしんくさんはこんな読み方をするんですね。私たちももう一度丁寧に読み直してみると、どんなコメントが書けるでしょうか?

教員賞は、『ラティーノ ラティーノ! 南米取材放浪記』（垣根涼介著）です。いったいどんな本なんだろう...?と思わず読んでみたくなるようなコメントを書いたのは、ペンネームfruitistさん（リベラルアーツ学群3年生）です。

底ぬけの明るさが素敵です。アメリカ人もびっくりの明るさです。ポジティブシンキングの方法を学びました。人間そのままの感性で生き、とてもまっすぐです。彼らは。本の中だと知りながら、カルチャーショックの爆発が多々起こります。

続いて留学生部門の受賞作品です。大賞には、海外でもよく知られている夏目漱石の小説『吾輩は猫である』に対する許嘉璇さん(中国)のコメントが選ばれました。

この本は長いですが、飽きずに読むことができます。漱石の猫と一緒に嘲笑や同情の気持ちを持ってあの猫の主人と友人を見れば、楽しくなる。その人たちは、古今東西のあらゆる面白い昔話を話すことが好きだ。中国からの留学生としてこの本はよく知っているが、読み進めるほど新しい発見がある。いつも読みながら笑った。彼らは馬鹿なことをしているのに自分が聡明だと信じている。他の日本文学の中で、この本はあの猫のように特別だ。読んでいるときは感じなかったが自分も彼らと同じことをしている彼らほど聡明ではないのだと悟った。

楽しく読みながら、笑ったり、新しい発見をしたり、ほんとに読書を楽しんでいる様子が伺えます。

審査員特別賞は『未来なんか見えない: 自傷する若者たち』（佐々木央著）に対する権勇哲さん（韓国）の若者らしい社会派コメントです。

「自傷は生きづらさから逃れるために自分の心身をきずつけること」これは、なんらかの理由で自分を傷つけざるをえなかった人たちの話です。いままで自傷する人はただの精神異常者と考えていたのですが、この本をきっかけに彼らがそのような選択をするしかなかった理由がすこしでも分かったような気がします。実は私も未来が怖いんです。知りようがないからです。でも実は私だけでなく皆辛いんだと思えば、なんとか潜り抜けられると思います。未来について考えるきっかけとして、この本をおすすめします!

彼はこの本を読んで未来への不安を訴えました。国や言語が違っていても若者たちの思いはそう変わらないようです。それにしても外国語（日本語）を学んで数年なのに、これだけの文章を書いてくるのだからすごいですね。



多くの学生/教職員が見守ってくれました

今回の選考にあたり、リベラルアーツ学群や基盤教育院の先生方にご協力いただきました。また当日は、受賞者や受賞者の友だち、実行委員会の学生、読書サークル「スタインベック」、生協留学生委員会、その他ラウンジを通りかかった学生たち、広報部、教務課職員のみなさん、教員のみなさん、生協職員のみなさんなどなど、昼休みという限られた時間にもかかわらず、多くのギャラリーが受賞式を見守ってくれました。

図書館読書運動プロジェクトでは、学生と教員、図書館、生協が協力して読書推進を行っています。今回は実行委員会があまり余裕を持って活動することができず、それが残念でした。来年はこの反省を活かして更に活動の場を広げたいと思います。今年も読書運動プロジェクト実行委員を募集します。興味のある新入生、学生諸君もいっしょに読書運動を展開してみませんか?（佐々木俊介 情報サービス課）



## 図書館で利用できる新聞について

図書館では、国内の主要な新聞（朝日・日経・読売・毎日・東京・神奈川新聞など）とアメリカ、イギリス、中国、韓国など海外の新聞を購入しています。日本の新聞は約4ヶ月、海外の新聞は約1年間保存しています。

新聞縮刷版では、朝日新聞、日本経済新聞、日経流通新聞、日経産業新聞、The Japan timesを継続的に購入しており、朝日新聞や日本経済新聞などは30～40年前のものから保存をしています。

また、新聞記事を検索することができるオンラインデータベースを図書館ホームページより提供しています。これらのオンラインデータベースでは、創刊号から収録されているものもあり、古い記事から最新の記事までを読むことができます。

ここでは、図書館で利用できる新聞のオンラインデータベースについて紹介します。

### ■ オンラインデータベース .....

学内LANに繋がっている学内のパソコンから利用することができます。図書館HPの「データベース」より各データベースにアクセスして利用することができます。

データベース名 収録新聞	収録内容	※同時 アクセス数
<b>間蔵Eビジュアル</b> 朝日新聞	創刊号(1879年)から最新の朝刊までの記事を収録しています。2010年4月より、歴史写真アーカイブなどのオプションコンテンツも利用できます。	5
<b>日経テレコン21</b> 日本経済新聞	1981年からの全文記事が収録されています。日経産業新聞、日経流通新聞、日経金融新聞などの記事も収録されています。	無制限
<b>ヨミダス歴史館</b> 読売新聞	創刊号(1874年)からの新聞記事が収録されています。他に英字版であるDaily Yomiuriの記事や人物データベースを利用できます。	2
<b>毎日Newsパック</b> 毎日新聞	1987年からの全文記事を収録しています。過去紙面データベースでは、創刊号(1872年)から50年前までに発行された新聞のうち、重大な事件を報じた紙面をPDFで収録しています。	1
<b>ProQuest Central</b> 海外新聞多数	Wall Street Journal(1984~), Los Angeles Times(1985~), New York Times(1980~), Washington Post(1987~), USA Today(1987~), Financial Times(1996~), Guardian(1992~), Observer(1995~), Times(1992~)ほか、世界中の主要紙500紙以上の記事を収録しています。	無制限
<b>LexisNexis at lexis.com</b> 海外新聞多数	New York Times(1980~), Washington Post(1977~), USA Today(1989~), Financial times(1982~), Guardian(1984~), Japan Times(1998~), Nikkei Weekly(1980~), South China Morning Post(1992~), Bangkok Post(1997~)ほか、世界中の主要紙100紙以上の記事を収録しています。	無制限 ID/パスワード の取得が必要
<b>The Times Digital Archive</b> The Times	ロンドンで創刊されたThe Timesの1785年の創刊号から1985年までの200年間分の紙面を検索、閲覧できます。	1

※同時アクセス数とは、同時に利用できる人数です。アクセス数オーバーで利用できない場合は、しばらく時間をおいてから再度アクセスしてください。

## 図書館の蔵書コーナー紹介



### ■資格・就職本コーナー

今回の岩井先生からのメッセージに関連して、図書館本館の3階入口を入ってすぐ左側には、資格・就職本のコーナーがあります。就職に関する資料は、キャリア開発センターにはもちろん豊富に揃っていますが、図書館でもある程度の資料を揃えています。就職に関する本は、エントリーシートや履歴書の書き方をはじめ、SPIなどの筆記試験対策、面接対策の本、会社図鑑やキーワード事典など、一通り揃えています。そして、図書館のものは貸出もできます（通常の図書と同様に3年生までは2週間、卒業年次生は1ヶ月）。資格に関するものでは、TOEIC、TOEFL、英検、フランス語検定、ドイツ語検定、中国語検定、日本語能力検定試験といった語学の試験や、簿記などの資格試験のテキスト・問題集などが、多数あります。こちらもちろん貸出できます。ただし、就職の筆記試験対策の問題集やTOEICのテキスト・問題集などは、試験の時期が近くなると借りていく学生が多くなりますので、「確実に借りて情報収集と対策を・・・」というみなさんは、ぜひお早めに！



### ■楽譜コーナー

今回の小早川先生からのメッセージに関連して、図書館本館の5階には、楽譜ばかりを集めた楽譜コーナーがあります。2010年2月の時点で、約720冊あります（これらの楽譜も、通常の本と同じように貸出可能です）。

総合文化学群の音楽専修の学生のみならず、ピアノを弾かれる方（特にクラシックを弾かれる方）や興味のある方は、ぜひぜひ利用してみてください。





## 2009年度前期(4月~9月)によく読まれた本

順位	資料名(本のタイトル)	著者名	請求記号	貸出回数
1	児童労働：廃絶にとりくむ国際社会	初岡昌一郎編	366.38/H42	14
2	子どもを喰う世界	ピーター・リーライト著/さくまゆみこ,くぼたのぞみ訳	366.38/L51/K	10
2	フィッシュストーリー	伊坂幸太郎著	913.6/I68	10
2	石ころの生涯：清水安三遺稿集 改定増補第5版(5刷)	清水安三著/清水畏三編	289.1/Sh49	10
2	ノルウェイの森 上	村上春樹著	913.6/Mu43/N(1)	10
2	ダイイング・アイ	東野圭吾著	913.6/H5	10
2	日英語の比較：発想・背景・文化：奥津文夫教授古稀記念論集 第2版	日英言語文化研究会編	830.4/N71	10
2	異文化コミュニケーション・入門(有斐閣アルマ:Basic)	池田理知子, E.M.クレマー著	361.45/I32/I	10
9	ライ麦畑でつかまえて(白水Uブックス:51)	J.D.サリンジャー著/野崎孝訳	933/Sa53/R	9
9	人間の内面を探る「自己・個人内過程」(心理測定尺度集:1)	山本真理子編	140.7/Sh69/(1)	9
9	ライフサイクル、その完結	E.H.エリクソン著/村瀬孝雄,近藤邦夫訳	143/E67/R	9
9	人間と社会のつながりをとらえる「対人関係・価値観」(心理測定尺度集:2)	吉田富二雄編	140.7/Sh69/(2)	9
9	最新・心理学序説	久保田圭伍, 野口京子編	140/Ku14/S	9
9	就活のバカヤロー：企業・大学・学生が演じる茶番劇(光文社新書:378)	石波嶺司, 大沢仁著	377.9/I82	9
9	観光マーケティング：理論と実際	長谷政弘編著	689/H35/K	9

ここでは、2009年度の前期(2009年4月1日~2009年9月30日)によく読まれた本(貸出回数の多かった図書)を紹介します※。上位にあがってきたものは、児童労働などの人権問題の本、言語学・コミュニケーションの本、心理学の本などが多くなっています。そのほか、ベストセラーとなっている文学作品(ハードカバーのもの)もあがってきています。

自分の読みたい本が図書館にない場合は、購入希望を出すこともできます(学群生は年間1人10冊、大学院生は年間1人30冊)。図書館の費用でみなさんが希望する本を購入して、希望を出した人が最初に読むことができますので、ぜひご利用ください。

※一般の図書を対象にしています。資格・就職の本や、読書プロジェクトコーナーの本、文庫・新書コーナーの本はよく借りられています、この統計では除いてあります。

## 図書館ミニツアーのお知らせ

## 館内ミニツアー開催

4月5日(月)~4月23日(金)の月曜日~金曜日の12:20~

今年も昨年同様に図書館の館内案内のミニツアーを開催します。平日のお昼休みの時間帯の約20分で、図書館の館内の主なコーナーと利用方法の案内を行ないます。参加希望者は、12:15までに図書館本館3階のレファレンスカウンター前(読書運動プロジェクトの本のラックの隣)に集合してください。

☆そのほかにも、データベースの利用方法のガイダンスなど、目的別のガイダンスを多数開催予定です。

また、「文献の集め方や論文の探し方を教えてほしい」といったような個別のご相談にもものりますので、カウンターまでお問い合わせ、ご相談ください。